

■ 発行人／荒山 淳

■ 発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



慶讃法要 参堂列 先駆を勤める名古屋楽僧と左右鼙太鼓（4月8日）

（写真の無断転用はご遠慮ください）

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

も く じ

- ・ 聖典研修
『教行信証』撰述の願い ②・③
第6回 真実の行
- ・ 大谷派の近現代史
第34回平和展を終えて ④・⑤
- ・ 研修報告
教化センター第十三期研 ⑥・⑦
究生 修了報告 その二
- ・ INFORMATION ⑧

帰去来、魔郷には停まるべからず

三六日間にわたる宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要が円成した。

参詣されたお一人おひとりには、様々な出会いと想い出が心に刻まれた事だろう。私自身も史上初の両堂同時法要附衆、結願での供舞に関わらせて頂いたことは光栄であり、法要に携わった多くの方々の真摯な姿勢に敬意を表することである。

この度、白洲に設置された舞樂台・鼙太鼓・樂舎は、一九九八年に厳修された蓮如上人五百回忌経験者の記憶を辿って準備が進められた。関係者からは「伝統法要が引継がれ繋がりを伝えることが、いかに困難かつ重要であるか」が語られていた。附衆の伝統は和国の教主聖徳太子の「三宝供養のため諸蕃衆を用うべし」（『聖徳太子伝暦』）の願いから浄土莊嚴の表現として始まったと言われる。その歴史と伝統の下、左右の双龍と鳳凰、金の日輪と銀の月輪が陽と陰を表し、華やかに彩色された打面六尺の世界最大級の鼙太鼓が百年前の真宗本願寺堂落慶法要・御真影還座式法要に据えられた。明治二八年九月、作者は太鼓師松浦延四郎によるものである。近現代の動乱をずっと見守り続けたその鼙太鼓が、今般の慶びの場を莊嚴したのである。

しかし「慶ぶ」といっても、豪華に飾ることに法要の意義があるのではな

い。「世の中は 地獄の上の 花見かな」と、小林一茶の俳句が頭をよぎる。世の中は残酷で、苦しみ悲しみに満ち溢れている。表向きは楽しく華やかに誤魔化せても、それは地獄の上で地獄を見ようとはせず花見をしているようなもので、一時的に地獄を忘れさせる世間そのものにすぎぬ。真宗門徒を生きた一茶が現代へ向けた警句とも受け取れる俳句である。「南無阿弥陀仏」の念仏が、世の現実を「地獄」と知らせ、我が身自身の「一定すみか」と、悲嘆の事実を伝える。幸福が、どんなに脆い基盤の上にあるのかを知るよしもなく、この世の悲しみから目を背け有頂天に生きようとする私に「帰去来、魔郷には停まるべからず」（聖典三二二頁）と念仏の喚ぶ声が聞こえてくる。法要中の附衆・供舞は花が咲き誇ったように豪華できらびやかなデコレーションではない。宗祖聖人の御教えを聴聞し「南無阿弥陀仏」の浄土に帰ることのできる慶びが樂舞となって莊嚴されているのではなからうか。

昨年来のロシアのウクライナ侵攻をはじめとして、世界情勢はまさに地獄の様相を呈している。この度の法要を慶び、信衆受持するとき「自衛のための敵基地攻撃能力」など、勇ましい掛け声に同調してはならない。

（主幹 荒山 淳）

聖典研修
2020年11月9日

『教行信証』撰述の願い

第六回 真実の行

講師 一楽真氏（大谷大学教授）



大行と大信―呼びかけと目覚め―

今回は、真実の行を顕かにする巻です。安田理深先生は真実の行と信を「呼びかけ」と「目覚め」とおっしゃいました。真実の行は、如来からの呼びかけです。

南無阿弥陀仏という一言は阿弥陀仏に南無せよという如来の勅命です。これは標榜の言葉でいえば、諸仏称名です。法然上人が阿弥陀仏に南無しておられる。そのお姿が、親鸞聖人には、阿弥陀仏に南無せよと届いてくる。

そこから本願文でいえば、我が国に生まれんと欲えという命令が聞こえてくるわけです。私たちはそういう呼び声にあわなければ、どこを向いて生きていけばよいか決まらない。親鸞聖人は、法然上人を通して阿弥陀の本願に出遇われたことを、今度は万人の上に掲げていくのが、「行巻」の主題になります。

ただ「行」とは人間が実践項目を立ててそれを積み上げていくものという固定観念があります。古い經典に、すべてのものは移り変わる。諸行無常である。怠ることなくつとめ精進せよといわれる。それで普通は八正道の行を励まなければならぬ。しかし、それはわれわれに成り立たないのではないだろうか。菩薩の

段階でいえば、自分は何段階まで登ったという思いが持てるのであれば、親鸞聖人は山を下りなかつたでしょう。しかし二十年やつてみてもさとり近づいていゝとは思えなかつたのです。

その意味で釈尊のお言葉は、阿弥陀を念じて生きよ、阿弥陀の名を称えて一生をおくれということに集約されると思うのです。それで、仏からのほたらきかけを大行というのです。内題の後に、謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。

（聖典一五七頁）

とあります。

「大行」とは、人間が積み上げていく実践ではなく、如来からのほたらきという意味ですが、ところが「無碍光如来の名を称する」とは、私たちが阿弥陀の行を称えることではないかというわけです。でも私たちの側に引き寄せたとたんに、声の大きさや回数・称える際の心境など比べる話になってしまうのです。

結論的なことを先に申し上げますと、親鸞聖人は、誰が念仏を称えても「如来からのほたらきかけ」だとおっしゃりたいのです。何遍称えても、如来からの「呼びかけ」（行）なのです。それがこれだつ

たか、忘れていたな、という形で私に「目覚め」（信）を引き起こす。これが真実の行と真実の信の関係です。だから「行巻」のはじめなのに、「謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり」といつて二つを切り離さない。しかも「信巻」の途中までは、行信という順序は絶対にするとしておられません。呼びかけ（行）があつて、目覚め（信）があるのです。法然上人に教えられ、それを通して阿弥陀の呼びかけが聞こえてきたところに、これだったかという目覚めがあつた。これが大行大信という関係なのです。

本願文を称名念仏として読む

本願文を称名念仏として読むのは、道綽・善導、源信・源空（法然）のお仕事になります。代表的には、善導・法然です。では法然上人のお仕事を見ていきます。法然上人は『選択集』本願章で、阿弥陀如来は称名念仏一つを往生の行と選ばれたことを尋ねていかれました。そこで阿弥陀如来は一人も漏らさないために、他の行を条件とせず、称名念仏一つを選ばれたことを確かめていかれます。しかし『大経』第十八願には称名念仏が明確に出てきません。

たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覚を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。（聖典一八頁）

また『大無量寿経』は衆生の称名念仏を言いません。称名は十七願に諸仏の称名が出てきます。親鸞聖人は十七願によ

つて真実行巻を書かれるわけですが、それは十八願には称名念仏が言葉として出ていないという問題がもととあるからです。法然上人はここに称名念仏一つを読み取っていくわけです。

明恵の『摧邪論』の論難があります。そこで第十八願を取り上げて、法然はこの本願を称名念仏一つというけれども、こゝは至心信樂とあり信心が大事で、菩提心を起こして仏道を求めることだと、法然の菩提心不要論に批判を加えるわけです。

それもくぐつて親鸞聖人は第十八願を至心信樂の願と信心の願として押さえ直します。でも明恵がいう至心信樂と親鸞聖人がいう至心信樂は全然違います。明恵がいう至心信樂は私が頑張つて信心を起こすのですから、私が求めて迷わないということなんです。でもそんなことが人間にできるのか、という親鸞聖人のお心からすれば、仏に呼びかけられてこの道を歩むことがきまる「如来より賜りたる信心」としてこの至心信樂を押さえられます。

唯除の文から十九願・二十願へ

もう一つ、十八願には「唯除五逆誹謗正法」とあります。法然上人が引かれるときには、「唯除」の文は省いておられます。これは法然上人からすると、念仏しないものは漏れていく、しかし念仏するものは一人残らず往生する、迷いを超えていくのである、という主旨で「唯除」の文は外されます。

親鸞聖人は「唯除」を大事にします。それは念仏することに潜む問題まで、「唯除」に見ていくからです。つまり私ほど念仏

しているものはいないというように、経歴や才能や素質で救われようとする者は、阿弥陀によって助けられようとしていません。それをいうために念仏している中にも、本願に背くことがあることを言わなければならぬ。これが、親鸞聖人が唯除を取り上げていく大きな理由です。

だから唯除の問題は「信巻」の課題ですが、もう一つその除いたものはどうなるのかという問題があります。本当に本願のお心に願けないものはどうなるのかといえば、切り捨てて終わりではないのです。そういうものこそなんとかしなければならぬというのが、第十九願・第二十願と続いて、化身土の問題として展開していくのです。十八願では念仏一つで一人残らず助かるのです。でもそれに願けないものは残念ながら漏れていく。これが唯除です。どういうものが漏れるのかといったら、念仏一つでは簡単すぎる、もう少し何かさせろというわけですが、そういうものには十九願の修諸功德で、徹底的に真面目な心で功德を修しなさいと呼びかけるのです。つまり実践項目を与える。実践してみると、いかに自分が徹底できないかが見えてくる。それはできていると思う間は十八願にはいきません。自分も相当なものだと腰がすわる。これは十九願の呼びかけを握ってしまったあり方でしょう。でもあれもこれも無理ですとなれば、功德のもとである念仏一つをせよとなる（植諸徳本）。ただこの意識は功德のもとを積み上げている意識です。だからできている私はやはり残ります。でもそれを通して功德を積んで助かる

るのではないという、だれもが平等に迎えられるという阿弥陀のお心に気がついてくれと、我々にはたつき続けるのが二十願です。

その意味で二十願は念仏にまつわって起こる自力の心を問題にしていけます。十九願は念仏に立つのかいろいろな行に立つのか、行の選びを問題にします。二十願は念仏一つというところになお残る、私ほどできているものはいない、逆に、私は全然できないからだめだという心をあぶり出すはたらきです。だから十八願の唯除の文から十九・二十願と展開してくる。ここに注目したのが、親鸞聖人です。

善導の『往生礼讃』

十八願の文を善導大師の言葉を通して称名念仏として押さえ直していけるのが、法然上人のお仕事です。『選択集』本願章の十八願文に続いて善導大師『往生礼讃』を引用しておられます。

また『無量寿経』に云うがごとし、
「もし我成仏せんに、十方の衆生我が名号を称せん、下十声に至るまで、もし生まれずは正覚を取らじ」と。かの仏、いま現にましまして成仏したまえり。当に知るべし、本誓重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生を得、と。
(聖典一七五頁)

このままの言葉は『無量寿経』にはありません。先の第十八願を善導大師が意味をとつてこういう言葉にしておられます。講録などでは善導大師が本願に加えたり引いたりということで「本願加減の

文」といいます。ただそれは言葉を操作したようになるので、曾我量深先生は本願のお心に帰った文章ということで「本願復元の文」と言われました。

この文で一番決定的なのは、称名（我が名号を称せん）という言葉です。本願文には十遍ほど念じなさい（乃至十念）と書いてある。しかしこの念は称名です、というのが、善導大師のおさえなのです。下十声に至るまでと書いてある。だから少ない方はたつた十遍の念仏でもと、心を静める余裕がなくても、必ず往生を得られるということが、本願文にいわれています。

『観経』では、上品上生から始まり、九通りの相が書かれています。この違いについて、善導大師は出会った縁のちがいとおっしゃいました。上品上生といつても人間の素質ではなく、どんな縁にあつたかがその人の仏教との出会い方を決めるのです。これを受けたのが『歎異抄』の親鸞聖人のお言葉です。「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべし」、そうなるべき縁がもよおしたなら、どんなことでもしてしまふ、人間の危うさを知っています。その時に上品上生は素晴らしいので、下品下生は劣った人間とランク付けするのではなく、縁の違いだとはつきりと押さえるのです。

下品下生には「この人、苦に逼められて念仏するに違あらず」とあります。苦しめて念仏することができないというのが、もし念ずるに能わずは、無量寿仏と称すべし」と。ここに名を称えるということ

がでできます。明らかに、念仏という言葉と称えるという言葉は区別されています。念仏は心を落ち着けて仏を心に想い浮かべることでしよう。でもそれを余裕がなく苦しくてできないのなら、口に称えるだけでいい、と善き友は告げるわけです。善導大師はここを引かれます。今まで悪事をはたらき傷つけあうような生き方をし、苦しい中で念仏もできない。でもそういうものを放っておけない。南無阿弥陀仏と称えることが阿弥陀との出遇を引き起こすのです。阿弥陀と出遇うことによって助かるというのは、上品の人の中品の人もみな一緒です。修行したから助かるのではなく仏に遇つて助かるのです。

「行巻」の主題

南無阿弥陀仏と称えるところに阿弥陀の世界をいたでいく。はかる必要のない、阿弥陀の世界を思い出すことができる。そこに良いか悪いか、得か損かと計つて苦しんでいたことからの解放があるのです。でも、また損より得した方がいいという根性が湧きますから、だから一生の間念仏は称え続けて下さい。比べなくてもいい世界は頂き続けるしかないというのが、法然上人の称名念仏に生きられたお姿だと思います。如来からのほたらきをいただく、阿弥陀を南無して生きよ、阿弥陀の世界を中心に生きなさいといたでいく南無阿弥陀仏を確かめ直す。これが『教行信証』の「行巻」の主題になっていくのです。

大谷派の
近現代史

第34回平和展を終えて

新野 和暢

【平和を考える視点】

「死ねば極楽。やつつけろ」。かつて、大谷派の僧侶は、出征する軍人に対して「死の覚悟」を説きました。日本がロシアに宣戦布告するよりも前に、大谷派は戦争協力を約束していました。それらの事実を知ること、どんな意味があるのでしょうか。ロシアによるウクライナへの武力侵攻が始まってから一年半が過ぎようとする現在、日本政府は内向きに平和を求めて、「安保法制の大転換」や「自主防衛」の動きを活発にさせ、人権を制限して一つの方向へ向かわせる動きを強めています。終わりの見えない戦争を目前に、私はどんな仏教を聞いているのでしょうか。「兵隊も武器も必要ない」と説かれた釈尊の教えに私たちの今を考える平和活動が「平和展」です。

【コロナ禍を越えて】

第34回「平和展 真宗大谷派の海外侵出―「満州開教」(前編)―」(二〇二三年三月一七日～二三日)を開催しました。

過去三年間はコロナ禍による感染症対策のため、パンフレットの発行をもって開催とし、展示会を見送ってきました。その間、朝鮮、台湾、華北の各地域で行った海外開教を取り上げ、地域ごとの特徴を明らかにしてきました。今回取り上げた「満州」と呼ばれた地域は、現在の中国東北部に位置します。日清(一八九四年)、日露(一九〇四年)の両戦争を経て日本は利権を獲得しました。「満州事変」(一九三二年九月一八日)という謀略を切っ掛けに武力侵攻し、一九三二年七月一日に「満州国」を設立しました。五つの民族(日、朝鮮、満州、蒙古、漢)が協和して暮らす独立国と喧伝されましたが、

実態は日本の傀儡国でした。それゆえ国際社会と衝突し、アジア太平洋戦争へと

突入していくという歴史の中心地が「満州」です。

大谷派海外開教のうち、最も手広く活動した地域であり、紹介すべき内容が多いため、「満州事変」を境にして時期を区切って取り上げることにしました。今回は前編として「満州事変」までとし、来年の「平和展」は後編を取りあげる予定です。

【戦争肯定の教学】

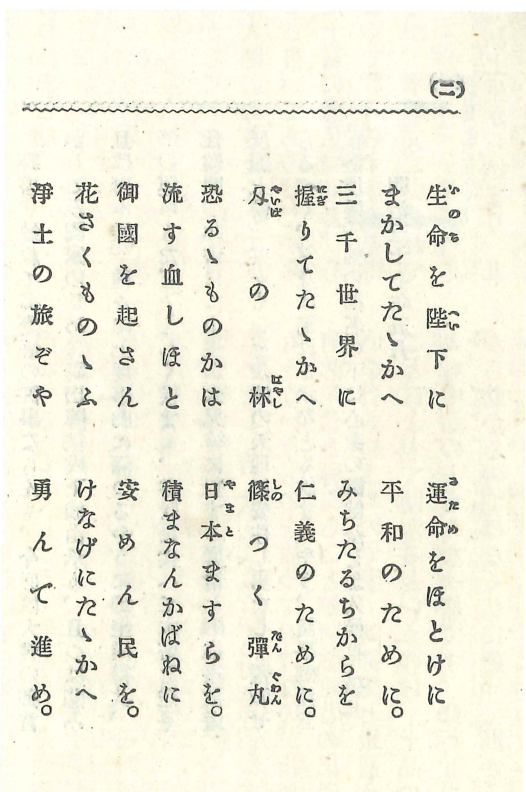
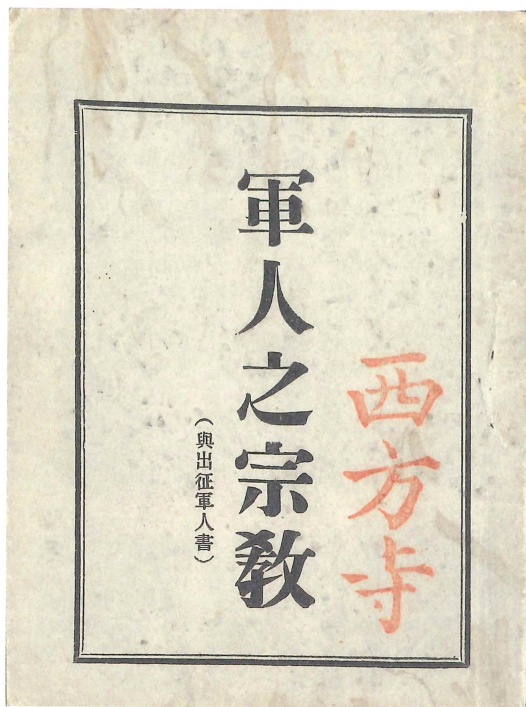
「平和展」を通して考えたいことは、戦争を肯定していた宗教的な根拠についてです。周知のように、仏教は不殺生を説き、また、軍隊も軍備も必要とするところがない世界を示しています(「仏説無量寿經」)。にもかかわらず、戦争に加担していくのはなぜだろうか、という問題が

ここにあるのです。

その点を考える一つの資料として『軍人之宗教』(一九〇五年五月二〇日)を展示しました。これは、日露戦争の際に出征する軍人に贈呈したパンフレットです。発行主は、「精神主義」を提唱した清沢満之を中心に成立した私塾「浩々洞」です。彼らの言う仏教と戦争の関係は次のようなものでした。

弾丸雨飛の中に行くについても南無阿弥陀仏と称へて進め、死ねば極楽だと信じて進め。

念仏と共に戦闘せよというのです。さらに、生命を陛下に 運命をほとけに、まかしてたゝかへ 平和のために。というスローガンを提示しました。天皇に命を捧げ、かつ、仏に運命を任せて死を覚悟した戦闘を奨励する平和論でした。



「生命を陛下に」「軍人之宗教」(与出征軍人書) 浩々洞発行(1905)

【特別展】

特別展は、「満州」侵略の前線基地」として、朝鮮半島の「京城（ソウル）」と遼東半島の大連の大谷派別院を紹介しました。これまで「平和展」では何度も「京城別院」を取り上げてきましたが、アルバム『大谷派本願寺 韓国京城別院本堂図』は新出資料です。

この写真アルバムは完成した本堂は勿論、設計に関わる平面図や建築途中の写真などが掲載されており、本堂落成記念で作成したと思われます。資料写真によると一九〇五（明治三八）年五月一日に京都の工作場で起工式を行い、本堂の材料を製材し、一九〇六（明治三九）年七月三日にソウル・南山の中腹にある倭城



「京城別院」本堂

台へ用材を運んで立柱式を執り行いました。そして同年八月十九日に上棟式、同年十一月三日に落成式、同年十一月十八日に遷仏式を執り行ったことが分かります。近代の「朝鮮開教」は、一八七七（明治十）年十月一日に釜山で開始し、「京城別院」の建立に繋がりました。ここは「満州開教」の前線基地的な役割を果たしました。大連別院は、日露戦争で中国遼東半島の権益を得て日本人が流入した一九一〇（明治四三）年一月十日に大谷派布教使の新田神量が大連開教を命じられ、同年四月に大連布教所を開設したことに始まります。一九三四（昭和九）年十一月九日に落慶遷仏法要が行われました。大連別院の建設中の写真など、貴重な資料を展示しました。

韓國京城倭城臺
大谷派本願寺別院

京都工作場より
起工式執行
明治三十八年五月一日
本材切組并ニ
諸材料成功
同年十月廿八日
同三十九年七月三日
同年八月十九日
同年十月三日
同年十月十八日
建築掛長 磯 經丸
建築掛負 坂 覺明
建築監督 荒谷孫八郎
建築師 尾瀧菊太郎
建築主任 松任銀次郎
工事監督 松任銀次郎
技手 松任銀次郎

『大谷派本願寺 韓国京城別院本堂図』

【満州開教のはじまり】

第1部「満州開教」のはじまり」では、日清日露の両戦争に対する国内評価と、大谷派の動きを確認しました。日露戦争の講和条約「ポーツマス条約」（一九〇五年九月五日）によって得た利権は、関東州（遼東半島の旅順、大連など）の租借権や、長春・旅順間の鉄道（東清鉄道）と、樺太の南半分の割譲でした。東清鉄道など鉄道路線（総延長一一〇〇km）を「南満州鉄道株式会社」が経営しました。半官半民の国策会社で「満州侵略」で重要な役割を果たしたことが知られています。

こうした政府の動きに対して大谷派は、日清戦争への協力を呼びかけ、日露戦争にあたっては開戦の前から戦争協力を約束していました。戦争が始まると、従軍僧侶を派遣し、大谷派別院や布教所などは、戦争協力のための施設として利用されました。「満州事変」以前に設立した大谷派の布教所、寺院等は、大連、安東、長春、哈爾濱など十七カ所に及びました。

【満州事変と大谷派】

第2部「満州事変」と大谷派」では、開教を旗印として侵略を支持していった大谷派を取りあげました。「満州事変」が勃発すると、本山は大連別院や「奉天」で活動する開教使に軍隊慰問を命じたのを皮切りに、従軍布教使を次々と派遣し、戦争との関係を深めていきました。「満州事変」の翌日（一九三二年九月一日）から一九三二年十一月二十一日「戦死者遺骨二二四体、満州国奉天布教所に収容」までの従軍僧侶の動向を一覧表にま

とめて展示しました。

注目すべきは、この時の日本仏教の戦争協力に対して、中国の仏教者が反対の意を表明している点です。中国仏教の中興として知られている太虚（一八九〇～一九四七）は、「満州事変」を知ると、反戦・反侵略を訴えました。

台湾、朝鮮、日本四千万仏教徒は、速やかに一大連合をなし、菩薩の大悲無限の神力を以て、日本軍閥政治家に因果の正法を論じ、その一切の非法行動を阻止させよう

彼ら中国の仏教家たちは、日本の敗戦まで仏教に基づく非戦を主張し続けました。しかし、日本仏教はそれらを否定し続けました。

【今を見つめる】

ロシアによるウクライナ侵略をうけて、真宗大谷派の宗議会（二〇二三年六月七日）と参議会（同年六月八日）は、「非戦決議二〇二二」を決議しました。これは武力行使への反対表明です。こうした平和や人権差別の問題に対する大谷派の動きを「平和展・パンフレット」に納めました。

「平和展」は毎年、春彼岸の時期に合わせて過去の戦争加担の事実を見つめています。今に生きる教えを、良く死ぬための教えへと転換させることのないよう、親鸞聖人の教えを確かめていきたいものです。パンフレットの問い合わせは、教化センターまで。

第34回平和展
パンフレット

※本稿の引用はすべて『第34回平和展パンフレット』による

研修報告

教化センター第十三期研究生

修了報告 その二

二〇二二年六月二十七日、教化センター第十三期研究生が修了した。修了式では各自、研究生として歩む中で学んだこと、感じたことなどを自由に報告する機会を設けた。今号では、前号に引き続き、その報告の一部を掲載させていただきます。

聖典研修の一楽真先生の講義が印象に残っています。「真実行は如来からの呼びかけであり、真実信とは目覚めである。法然上人が南無している時、その姿は宗祖にとって「南無せよ」という呼びかけ、阿弥陀からの勅命だった」というお話でした。念仏が分らず疑問を抱えていた時だったので、「自分も含め、誰が南無阿弥陀仏を称えようと、それは自分への呼びかけである」という先生の言葉がとてもしっくりきました。

研究生の座談会では、お内仏の形の変化が話題に出ました。住宅様式に合わせて小さな木の箱の形のものを見かけることが増えました。では、きらびやかなお内仏はいつから主流になったのか。何人かの門徒さんに聞いてみると、戦後にきらびやかなお内仏を購入したという方が多く、その前は小さな木の箱だったと教えてもらいました。想像よりも歴史が浅くて驚きました。形にこだわり、お金をかけることをいつの間にか善としている自身の価値観と執着の根深さを感じました。しかし、仏事離れが進んでいるのは確かです。お内仏は家具ではなく、空間であることをお伝えしたいと思います。

鈴木 日奈子

私は昭和十五年の生まれです。父は海軍に召集され、家は空襲で焼け、猿投村（現豊田市）へ家族で疎開しました。物資が不足した時代でしたが、私は腹減りで、随分と母親を悲しませた思い出があります。一昨年に母親の五〇回忌を勤め、来年は父親の五〇回忌の予定です。この両親の間に一人の人間として生まれ、連れ合いに支えてもらいながら、仏法に出会い聞くことができた。そのことに感動しています。

この度の慶讃法要のテーマが「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」です。病氣や戦争の問題が世界中に広がり先行きが不安な中、私の生き方はどこへ向かっていくのか。喜びを持つて生きていけるのか。「これから死ぬまで南無せよ」という課題を両親や宗祖から問われていると思います。

私はお釈迦様のおさとりに関心があり、研究生の中で学びを進めてきました。お釈迦様は出家直後に苦行を究めながらも止め、乳粥を食べて元氣になり瞑想に入られた。悪魔と戦い、生老病死の苦の原因を追究され、目覚められました。私にとっては、皆さんの前で報告するこのレポートが一つの苦しみでした。

服部 博司

研究生の学習会では『大無量寿経』と『観無量寿経』を学びましたが、私はその内容が全く分からなかったため、經典の原文と訳文を書き写し、対比できるようにパソコンで打ち込みました。今後ともそれを読み返し、何が書いてあるのか少しずつでも理解したいと思っています。

私は二十年前、チラシがきっかけで親鸞会の講座に足を運びました。それから一年半くらいどっぷりつかり、富山県の親鸞会館で帰敬式まで受けてしまいました。しかし、親鸞会が言う積善のおしえは宗祖の説かれたこととは違うと感じたので、何度も聞き議論をしました。違和感はずいぶん消えました。その後、真宗本廟への上山奉仕の際、改めて帰敬式を受け直しました。

親鸞会のどこに問題があったか整理がついていなかったもので、このレポートをきっかけに紅樸英顕氏の「現代における異義の研究」という論文を読みました。この論文に対し、親鸞会から紅樸氏、ならびに西本願寺へ何度も質問状が出されたようです。そこには教義解釈の違いが見られますが、親鸞会からの質問では「ウソかマコトか」という二者択一の追及が多く、その姿勢に一番問題を感じました。

原田 育男

研究生になって一番分かったのは「学ぶということ」についてです。大学卒業後、興味のあることなどは自分で調べましたが、それでも分からない時はそこで立ち止まったり、「そういうものか」と受け流して分かったつもりで過ごしていました。しかし、攻究・座談の場を持つということは全然違う。何が分からないかがハッキリしました。他の人の疑問や考



議事堂の仏具みがき（2021年8月）

えが場に出され、それによって新たな自分の疑問や課題も出てきました。「学ぶとはこういうことだった」と、楽しく過ごしました。

学習会では、『大経』において阿難が如来に出あう、阿弥陀に出あうことを、『観経』において韋提希が阿弥陀に出あう、彼女を通して私達が本願に出あうということを受け取り直しました。「出あう」ということでは、研究生として、皆さんや先生方と出あうことは、法に出あう一つのタイミング、法機だったのだと思います。攻究・座談の時の皆さんの言葉は、走り書きで書き留めてあります。書くまでもなく、頭に残っている言葉もたくさんあります。この先必ず、これらの言葉に私はもう一度出あい、気付けられることとしましょう。

本多 真美

私は研究生の間に、「死刑はよくない」に辿り着くまで」という論文を書きました。きっかけは聖典研修の一楽先生の講

義でした。どういう訳か、「死刑はよくない」と頭の後ろの方から聞こえてきた。私は法学部の学生の頃から死刑肯定論者でした。報道で死刑のニュースを聞いても疑問は出てきませんでした。しかし、自分なりに死刑について調べ、真剣に考えてみると、これまで死刑廃止を訴える人の意見を聞くこととしてこなかった自分に気がきました。

団藤重光という、刑法学者がおられますが、先生は最高裁の判事になってから死刑廃止論者になっています。先生が廃止を言う理由は「誤審がある」という点です。同じ事件でも担当する裁判官によって判決は変わり、いくつもの事件で再審請求が出され認められている。それで人の命が奪われる可能性を考えると、強い疑問を感じます。私は『歎異抄』の第十三章は、人間は条件が整えば何をしかずか分からない不確かな存在だということをお話してくださいと受けて止めています。不確かな人間が刑罰を与えること自体、いろいろ問題があるのではないかと感じています。 松林 克紀

「説法の者においては、医王の想を作せば、拔苦の想を作せ。(中略)それ聴法の者せば、増長勝解の想を作せ、愈病の想を作せ。もしよくかくのごとき説者・聴者は、みな仏法を招降するに堪えたり、常に仏前に生ぜん」(教行信証) 本願を伝えさせていただくお役目をいただいています。けれど、まだ自分の自分は、自身の至らなさに情けなくなる事ばかりです。その至らなさを打破するには親鸞様の言葉を聞いていくしかありません。宗門の大学を出ていない私に恩師の廣瀬惺先生がおっしゃいました。「君は宗門大学を出てい

ない事を一生コンプレックスとして持ちなさい。その気持ちを持った君は一生学び続けるから」劣等感を補うために研究生として学びの場に身を置きました。親鸞様の言葉に耳を傾け、自身の言葉で理解していく作業の中で気付かされたことは、時代も景色も風景も移り行くけれど、この時、この場で、発した言葉は変わらないということ。親鸞様がこの時この場で発した言葉を大切にその背景を思い出していく。そして先達の言葉にも耳を傾ける。「聞け、書け、語れ」自身の責任として、この学びをこれからも続けていきます。 祖父江 佳乃

研究生として学ぶ中、「今」の大切さ、「学ぶ事」の大切さ、「座談」の大切さを改めて感じました。そして、身近に仏法を感じるようになりました。コロナ禍の中、周囲の環境は目まぐるしく変化し、学習会に参加して「学ぶ事」も難しくなり、次回の約束すらできなくなってしまうしました。このご縁を頂いて改めて「今」の大切さを実感しました。



第十三期生開講式 (2019年4月)

座談では、いろんな方の考えを尊重し合い、ありのままの自分で安心して話せる場であると体験しました。話を聞き、その人の考えや知識を共有させてもらい、改めて自身の偏りに気付きました。何を話せばよいか躊躇しましたが、「座談は何でも話していい場」という言葉に救われました。

座談会では「死」というテーマがよく出されていたので、私の体験も少しお話しします。私は研究生として学ぶ中、いつも抛り所としていた母を亡くしました。以前、父を亡くした時とは受け止め方が違っていた気がします。私の考えていた救いとは異なる、阿弥陀様の救いを、身をもって、段階的に感じたような気がします。このことも私にとっては大切なご縁でした。 石原 厚子

研究生としてご縁を頂きながら、乳ガンという病気が判明し、その治療で途中からは欠席することになりました。

最後を迎える時でも、念仏の一声ならば言えそうだと聞いていましたが、「南無阿弥陀仏」と口にしても一瞬のことで、また死の不安に押しつぶされます。そんな中、研究生の皆さんや、ご聴聞で出あった御同朋からの連絡や励ましを頂き、ひと時不安から解放されます。お寺は葬式ビジネスばかりではないかと思いがついていた私ですが、研究生というサンガの中、念仏申しながら社会活動をさまざまにしている皆さんのことを知り、その姿にお浄土を見ました。この出あいに感謝いたします。

土井紀明師の『近代教学と伝統宗学の接点』には、真宗を聞法している人の姿、信心の課題が書かれていました。その中、

「本当には本願を信じられていないのであるが、信じたことにする。信じたのだと自分に言い聞かせてそこに落ち着こうとする」というものこそ、まさに自分のことを言い当てていると思いました。これから自分にどんな生き方ができるのか、全く想像ができません。ただ「寂靜南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」と称えるだけです。 長谷川 由美

「真宗の教えとはこういうことだ」と、感覚的に分かったような気になっていました。皆さんと一緒に『聖典』を読み学ぶ中で、「南無阿弥陀仏が真実であるのは、私の存在がまことなき虚偽不実であるから」と教えられました。そのことは、心から腹落ちできないという点も含めて、分かったこととしていました。日頃の法話にて、聞き心地の良い有り難い話を分かったように話すけれども、自分では全く有り難く感じていないのです。そこで一番虚しいのは、その話をしている自分自身であることに気付かされました。「真実」は「真実ではない私」が分かったと思った瞬間、握った瞬間から、真実ではなくなくなってしまったのでしょうか。聞いた仏法を自分の手柄に変えている私がいいます。 研究生として学びの場に身を置く中で、かつてご縁のあった教務所長から「仏法は有り難いことを聞くのではなく、本当の道理を聞くものである」と教えられたことを思い出しました。真実信心によって莊嚴される世界は私たちが持つている意味や価値を超えた世界と教えられながら、その教えを意味や価値によって理解しようとしている私たちには、仏法によってしか意味や価値から解放されることはないでしょう。 愛知 宗磨

2022年度事業報告

◆2022年度聖典研修

テーマ 「『教行信証』『行巻』を読む
—立教開宗の意義—」

講師 梶原 敬一氏
(姫路第一病院小児科部長・
真宗大谷派僧侶)



- ① 2022年11月10日(木)
- ② 2023年1月20日(金)
- ③ 2023年3月10日(金)
- ④ 2023年5月12日(金)

2022年度研究業務報告

①大谷派の近現代史

◆第34回平和展(6-7面参照)

◆平和展学習会

2022年 8月5日(金)・8月24日(木)・9月8日(木)・
10月19日(水)・11月11日(金)・11月30日(水)・
12月15日(木)・12月21日(水)
2023年 1月11日(水)・2月17日(金)・3月1日(水)・
5月26日(金)

◆特別学習会 2023年3月20日(月)

テーマ 「全国水平社と宗教」

講師 近藤 祐昭氏(愛知県部落解放・人権研究所理事長)

②尾張の真宗史

◆センター所蔵資料の整理

教化センターには、開設以来、教区内外から寄贈等によりもたらされた資料が数多く存在しているが、実はそのほとんどが未整理のままであり、以前から保存・管理が課題となっていた。そこで今年度は、それらのうち、本尊・聖教等の法宝物と古記録の整理を試み、結果約160点の資料の分類と目録作りを完了することができた。ただ古書類については、多くがまだ手付かずの状態が残っているので、来年度以降、尾張真宗史の調査研究とともに、随時分別・整理していこうと考えている。(小島 智)

③現代社会と真宗教化

◆教区教化委員会における帰敬式再考委員会・真宗の葬儀実行委員会と連携し、学習、調査、リーフレット作成などの支援協力。

また、いのちに向き合う宗教者の会(自死者追悼法要・いっぶく処)への支援協力。

◆2022年度特別講座「真宗儀式の教相」

テーマ 「帰敬式をめぐって」

2022年12月1日(木)

講師 竹橋 太氏(真宗大谷派儀式指導研究所 研究員)

第14期研究生学習報告



研究生報恩講「正信偈」草四句目下 念仏讃陶三六首 回向を勤めた

◆2022年

- 4月26日(火) 観経序分に学ぶ① 荒山 淳 主幹
- 5月10日(火) お勤めと教えの意味を『聖典』に尋ねる① 池田 真氏
- 6月21日(火) 研究生奉仕団事前学習 長澤 隆司 次長
- 7月12日(火) お勤めと教えの意味を『聖典』に尋ねる②
- 8月19日(金) 観経序分に学ぶ②
- 9月7日(水) お勤めと教えの意味を『聖典』に尋ねる③
- 10月13日(木) 真宗を学ぶ入口① 中谷 隆志氏
- 11月4日(金) 真宗を学ぶ入口②
- 11月24～25日 研究生上山研修
- 12月20日(火) お勤めと教えの意味を『聖典』に尋ねる④

◆2023年

- 1月17日(火) 研究生報恩講
- 2月9日(木) お勤めと教えの意味を『聖典』に尋ねる⑤
- 3月1日(水) 観経序分に学ぶ③
- 4月11日(火) 観経序分に学ぶ④
- 5月19日(金) お勤めと教えの意味を『聖典』に尋ねる⑥

INFORMATION

2023年度事業(予定)

◆聖典研修 午後6時～8時

テーマ 「『正信偈』を読む」

講師 梶原 敬一氏(姫路第一病院小児科部長・真宗大谷派僧侶)

- 第1回 2023年9月8日(金) 第2回 2023年11月17日(金)
- 第3回 2024年1月19日(金) 第4回 2024年3月15日(金)
- 第5回 2024年5月24日(金)

◆真宗儀式の教相 午後6時～8時

テーマ 「法要式をめぐって—葬儀式—」

講師 竹橋 太氏(真宗大谷派儀式指導研究所 研究員)

期日 2023年12月6日(水)

◆あいち平和のための戦争展

教化センターから出展します

【日時】 8月10日(木)～8月13日(日) 午前10時～午後5時

【会場】 市民ギャラリー矢田(名古屋市東区大幸南1-1-10)

【入場料】 500円(高校生以下、障害者および介助者 無料)

【問合せ】 2023あいち・平和のための戦争展 実行委員会

TEL: 052-931-0070

《雑感》 昨年末に発行した『ジャーナル』114号において、初めて担当として事務作業に携わった。大変勉強になったが、特に発行後の読者の反応が印象に残っている。記事の内容に関する感想や、掲載した写真に対する指摘などがあった。これらの反応は発信したからこそ生まれたものであり、今年度2回目の発行ができることを嬉しく思っている。センターに身を置く一人として、今後とも共に学び発信することを継続していきたい。(た)

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ

【お東ネット】 <https://www.ohigashi.net>

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

■教化センター

〈開館〉月～金 10:00～21:00

〈貸出〉書籍2週間 視聴覚1週間

教化センターSNS

